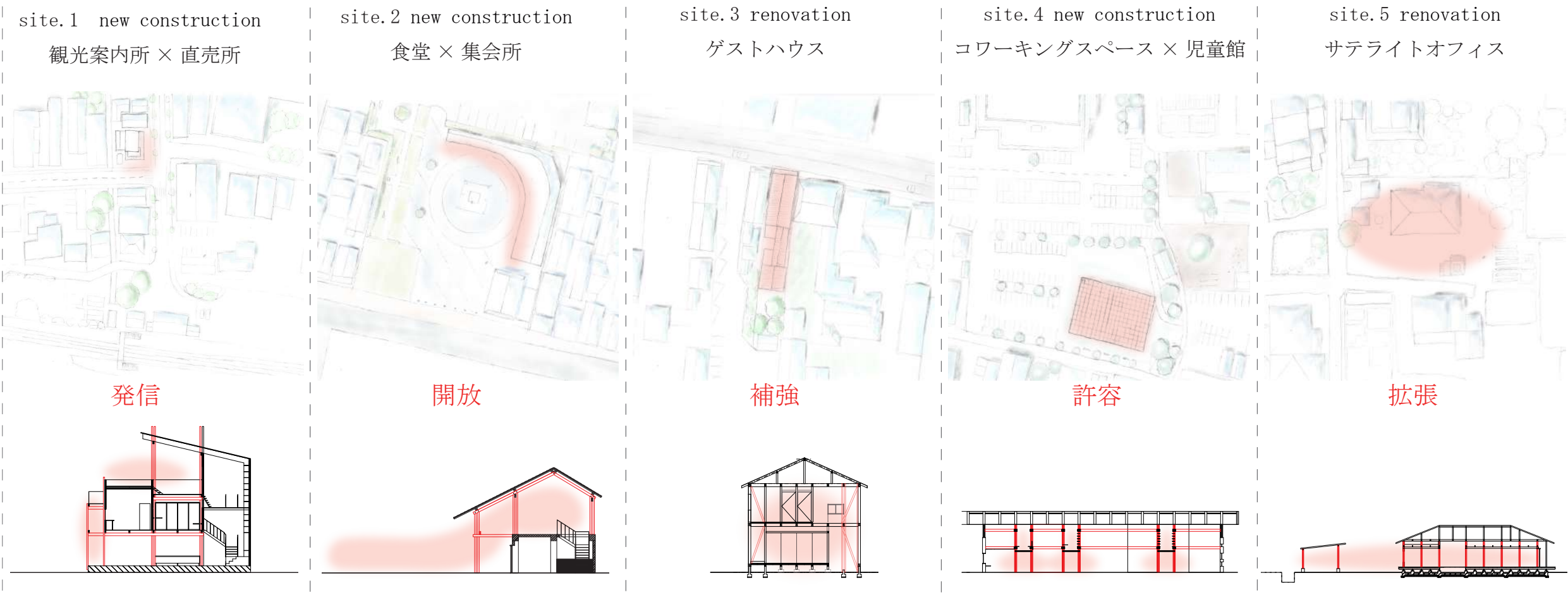


0.8 設計について - プログラムと形態 -

プログラムとしては、地域の歴史と現状により必要不可欠な機能を再解釈し、町の営みが空間的余白にまわりつくことで使い方の汎用性を獲得し、地域住民だけでなく移住者や観光客が日常的に使いこなす公共建築の在り方を考えました。

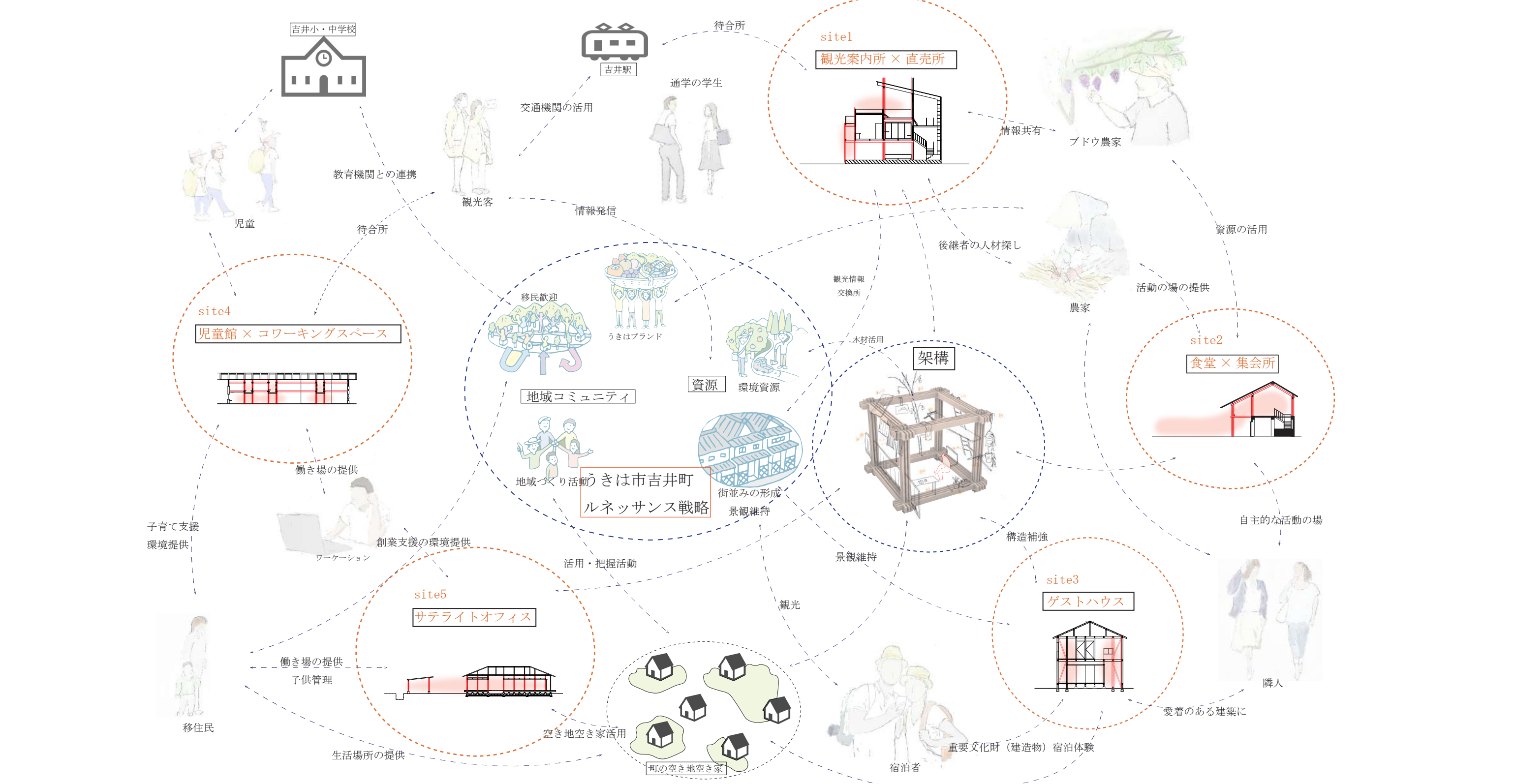
形態的としては、それぞれの site ごとに周辺環境や既存の建築などのコンテクストに応じた空間的余白の在り方を架構を用いて人々に営みの端緒を開くように構成し、建築の形態を確定させた。

- site.1 地域の玄関口である駅前から地域の営みを「発信」する
- site.2 地域のリビングである広場に人間の営みを「開放」する
- site.3 重要文化財（建造物）を町に残し続けるために建築を「補強」する
- site.4 室として機能性を担保しながら活動が溢れだし営みを「許容」する
- site.5 町に溢れる空き家改修するだけでなく、庭に領域を「拡張」する



0.9 建築単体で完結しない町のネットワークとなる新たな施設

提案する5つの建築はうきは市の人口減少の歯止めをかける後期基本計画であるルネサンス戦略を軸に、町の小さな営みを救い上げるような5つの建築が単に独立した存在ではなく地域全体のネットワークとして連関させる。利用者が使いこなす空間の在り方と町全体としての仕組みは小さな地域の個性であり愛着のわく建築として今後使い続けられる。

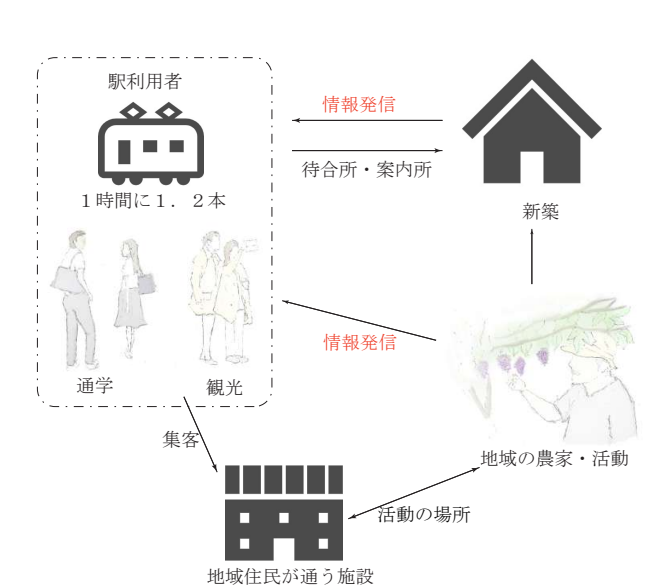


0.10 対象敷地 - 町の主要動線 -



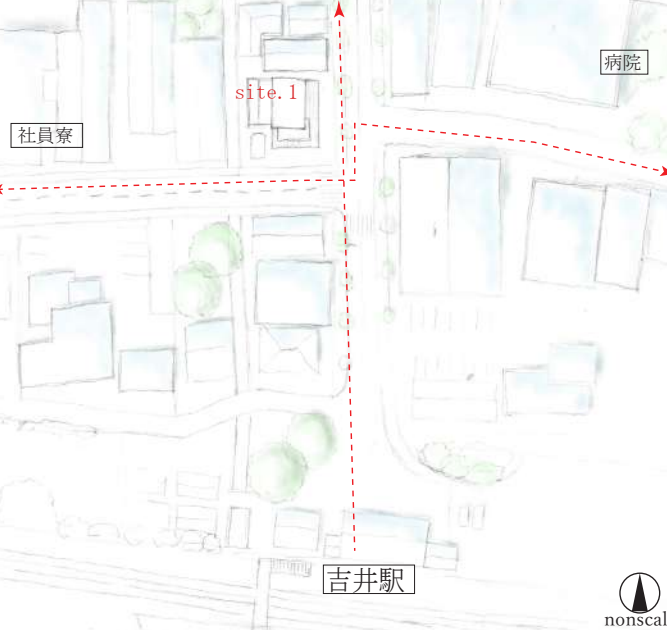
site.1 new construction 観光案内所 × 直売所

propose

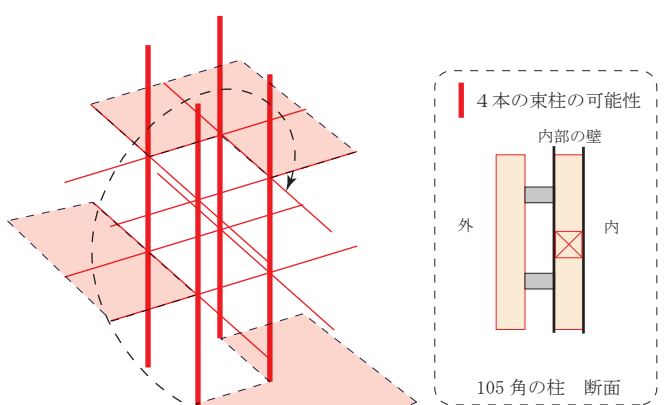


地域の玄関口である駅前周辺は過疎化が進み賑わいのない場所である。そのような場所に地域の営みが垣間見える観光案内所を提案する。単に機能を設置したのではなく、この建築から地域の資源である観光地や、地元民しか知らない施設・情報を地域外の人に発信すると伴い町の日常的な営みを視覚できるように計画する

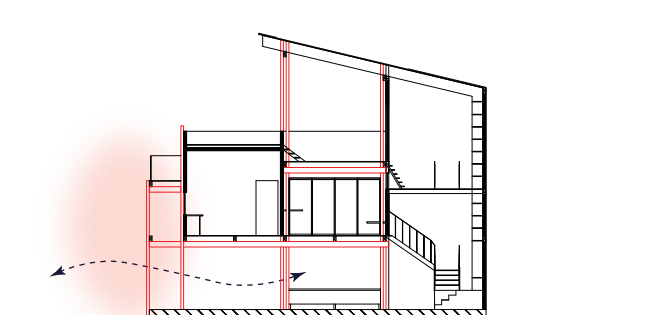
diagram



①駅の入口である交差点に位置する空き地を活用し、観光案内所と直売所を計画。敷地は道路に2面接しており、子供たちの通学路や周囲の病院で動く方の祭と仕事場の中間地点に位置しているため、これらの流動的な人の流れを内包できる架構を考える



②町の流れを延長させるように建築に取り込むために従来の田の字プランではなく4本の束柱を用いた2重線の構法により構造的な強度を作りつつ、床や壁は事後的にいくらか変える事ができ、屋根の高さや今後の増築に対応できる自由度を持っている。



③町に面している建築のファサードを2本の柱を用いて覆う事で架構部を活用した小さな介入つまり町の営みが建築の表情を作り出す。観光客や地域外の人に機能やデータではなく、人の営みを通して地域らしさを発信する建築である。

吉井町の玄関口として小さな営みから地域らしさを発信する

